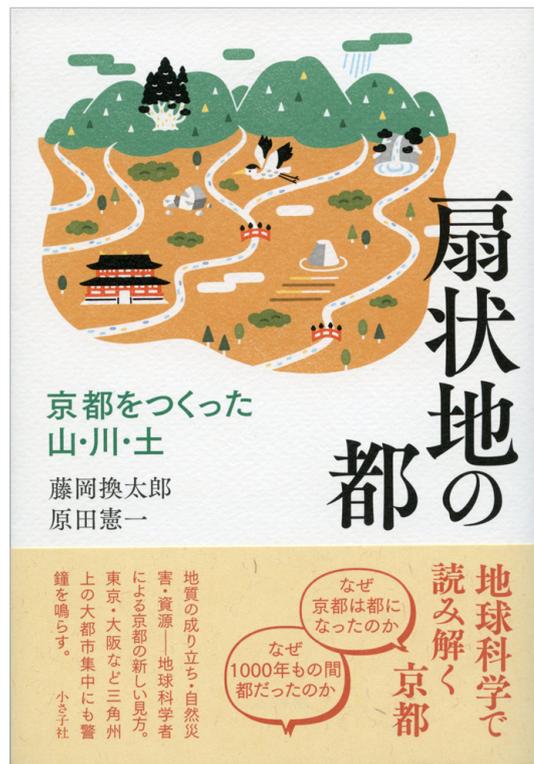


扇状地の都 京都をつくった山・川・土

藤岡 換太郎・原田 憲一 [著]

小さ子社
発売日：2024年10月25日
定価：2200円（税別）
ISBN：978-4-909782-24-3
四六判
208ページ



京都は、794年の平安遷都から1868年の東京行幸（遷都）までの1000年を超える間、天皇の在所であり、また文化の中心である都でした。なぜ、京都が平安京として成り立ち、その後長くにわたり都であり続けたのかを、地球科学の立場から考える著作が出版されました。

著者は、幅広い観点から多くの著書を出されている藤岡換太郎氏と原田憲一氏のお二人です。京都で生まれ育ち、海洋地質の研究を出発点にしたという共通点があり、お二人の出会いと50年以上にわたる交流につながり、最近の京都での議論が本書で実を結んだということです。

本書は以下の5章からなります。文章はわかりやすい講演の語り口のように、歴史や文物を語り部として伝えていくように感じられます。話が大きくわき道にそれそうになるところは、コラムで詳述されています。

- 第1章 地球科学から見た平安京の系譜
- 第2章 災害が京都にもたらしたもの
- 第3章 京都の文化を支えた資源
- 第4章 対談 地球科学から見た京都
- 終章 京都と東京の比較—扇状地か三角州か—

第1章では、平安京の成立までの都の変遷とそれらの地球科学的な立地の比較から検討が始まります。

794年に平安京に遷都される前には、643年に成立した

飛鳥板蓋宮から長岡京まで10の都があり、平均15年という短期間で次々と遷都されていました。それらの都のすべてが奈良盆地・大阪平野・滋賀の南部・京都盆地と近畿地方の中央の低地にあることから、この地域が国の政治の中心にふさわしい地理的な位置だったと思われます。そして、平安京が1000年以上も都であり続けたのは、平坦地の広さ・水の豊かさなど都の立地に必要な地球科学的条件がそれまでの都より優れており、その後の発展にも対応できる地勢が備わっていたからと思われます。

さらに深く京都の特性を考える基礎として、平安京とその周辺を含む地域の地史を概観し、成り立ちが紹介されています。5億年前からユーラシア大陸の東端で、付加作用により成長して日本列島の骨格が形成されました。2000万年前頃から日本海の形成に伴い大陸から離れて移動した陸塊が日本列島になりました。その後のプレート運動による応力場の変化により、近畿三角地帯と呼ばれる山地と盆地の配列する複雑で特徴ある地形が形成されました。160万年前以降、京都盆地・奈良盆地・大阪平野では、海水準の変動により海成層と淡水成層の繰り返しからなる大阪層群が埋積して平坦な地形が形成されました。最終氷期の低海水準から現在の海水準へ至る過程で作られたのが扇状地や三角州になります。

第2章では、都の存続を危うくすることもある様々な災害を考察しています。



地震は現代の日本でも最も深刻な災害をもたらす現象です。この章では、地震の発生機構、南海トラフ地震の発生状況などの日本の歴史地震、京都に大きな被害のあった地震が詳しく論じられています。京都には多数の活断層が存在し、1596年の伏見城の天守閣が大破し豊臣秀吉も命拾いした慶長伏見地震など大きな被害のあった地震も多くありますが、海に面していないので津波もなく壊滅的な災害とはならなかったようです。そのほかの災害である台風・洪水・地滑り・火災(大火)についても、京都に与えた被害や被害からの復興、さらに災害がその後の恵みになった例も紹介されています。

第3章では、京都の文化の発展に関連した資源について語られます。

資源とは、「現在(当時)の技術で経済的に利用可能な、有用な天然物を言う」と定義され、具体的な資源として、水資源(河川水・地下水)、森林資源、生物資源(淡水魚・京野菜)、陶土資源(粘土・釉薬・壁土)、岩石・土砂資源(庭石・白砂・石材・砥石・顔料)が詳しく説明されています。それらは、京都での生活・生産・交流の発達、技術の高度化と多様な文化の発展の過程で、扇状地である京都の川と地下、そして近隣山地(東山・北山・西山)の天然物を資源として認識し利用してきた歴史です。大阪層群の利用でも、西山の丘陵のタケノコ生産地では淡水成粘土を客土に使い、清水焼では海成粘土を陶土に使うといった粘土の特性を生かしていることなど、それぞれの資源と文化に係る逸話が語られています。

第4章は、本書の出版責任者の設定された課題を中心に、お二人が自由に語られている対談です。1-3章における議論の補足に加え、将来への考えるべき問題の提起がされています。著者らの体験や研究に関する話を通して、その観点のユニークさが見事に表れているところです。ここは、二人の会話を楽しんでもらいたいところです。

終章では、都が1000年以上続いた扇状地にある京都と、江戸時代の始まりから政治の中心となり明治から都となった三角州にある江戸・東京を、二つの都市の立地とそれが産業や文化に与えた影響を考察しています。江戸は三角州にあるため、京都の伏見の酒造や清水焼のような地下水や近隣の陶土を利用するような産業は発達しませんでした。近代～現代は産業革命により物流・産業・人口動態に

多大な変化をもたらし、東京などの沿岸域の都市は土木・建築技術の開発により立地の制約が無くなったかのように発展しました。著者らは、沿岸域都市の繁栄を支えるエネルギー・鉱物資源の殆どを海外に依存していることと現在の東京への一極集中の脆弱性を指摘し、将来の日本の大都市や地方都市の在り方を地球科学的な視点で考えることを提言しています。

私は著者のお二人と同じく、海洋地質の調査・研究をしてきました。藤岡氏とは伊豆-小笠原弧の深海掘削の航海で、原田氏とは地質調査所の南太平洋でのマンガン団塊調査の航海で一緒しました。航海のほか様々な場でご一緒した時のお二人の楽しく巧みな話術が、この本に現れているのを感じました。私もお二人と同じく京都に生まれ、この本でいう鴨川の扇状地で育ちました。底冷えの冬や暑い夏といった気候や市内のどこからでも見える山並みから、京都が盆地であることはいつも感じていました。しかし、扇状地であることは意識していなかったと思います。九条通にある東寺の五重塔(高さ55m)のてっぺんの標高が北大路通にあたると小中学校で教えられたことや、街中の東西の小路に短い急な斜面があったことを思い出しますが、それらは扇状地の南北に広がる大きな斜面の比高と扇状地形成時の起伏の名残だったと理解できます。地下水が豊富で良質であるという本書の記述には、小学校低学年ごろまで自宅でも井戸水を使っていたことや、通っていた小学校に豊臣秀吉が茶の湯に使ったと伝えられる「豊園水」という古井戸があったことを思い出しました。次に京都を訪れた時には、この本で書かれた扇状地をキーワードとして、名所・旧跡や伝統産業の老舗がなぜそこにあるかを考えてみたくなりました。

都としての京都における都市と文化の発展の歴史と地史・地形・資源を含む地球科学的事象との関係の解明を試みたこの本を、まずは京都を深く知るためのガイドブックとして読んでいただきたい。この本は、京都にとどまらず日本の都市や地域での人々の営みとその場の地球科学的特性との関連性を考える新たな視点を提供する本として活用いただけるものと思います。

(産総研 地質調査総合センター地質情報研究部門 西村 昭)